教訓
繪入

時代考

紀行

9
1628
16

門 口 9
號 1628
卷 16

宮城縣圖書

比賣鑑紀行卷第七

目録

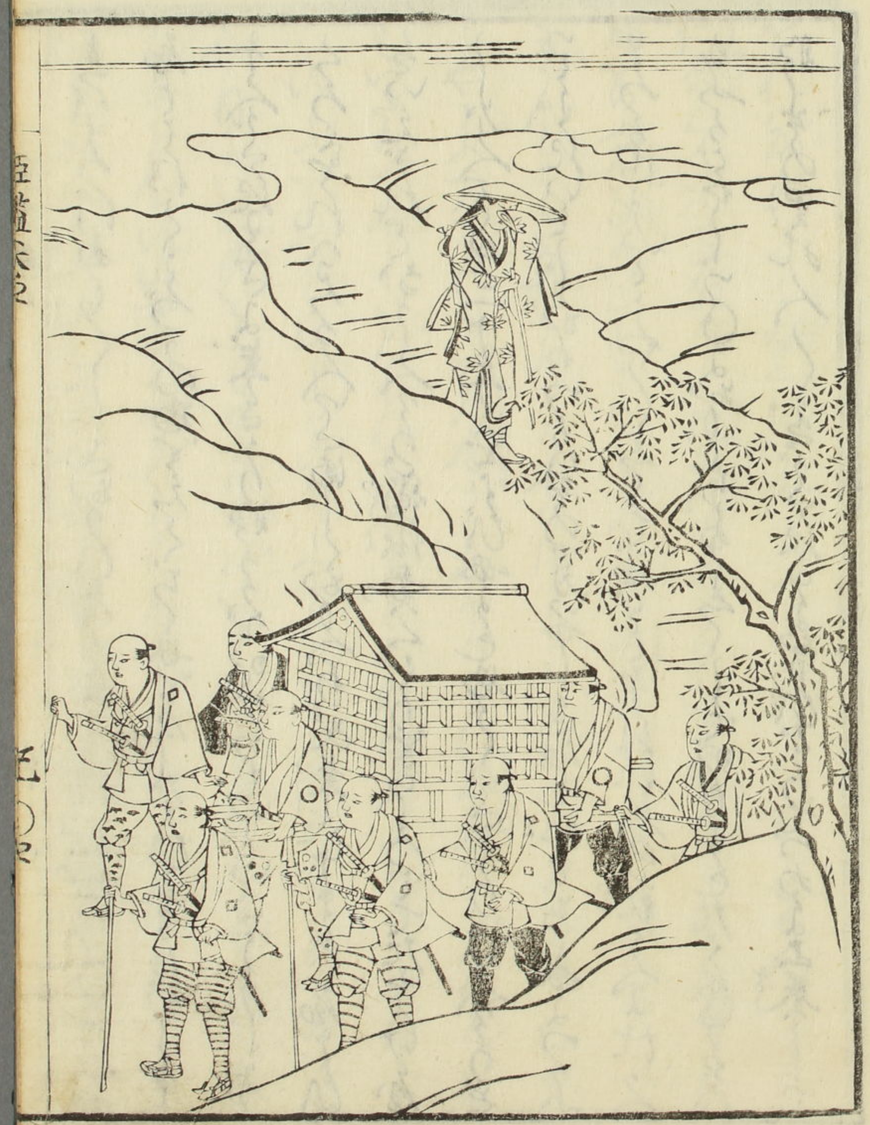
橘逸勢女　文德實録
福依貴　同上
請僧孤女　金葉集
供養貧女　今昔物語
南統紫女　發心集
二条院讃岐　非論語
葦女微妙　東鑑
平親清女　俊裕遺集
坂東僧女　砂石集
兒島巷女
完栗巷女

比賣鑑紀行卷之四

紀行第四　此卷八第三の末紀れすゑなり

むし仁明天皇の御世より但馬按察遠勢とゝひろゐ八学ぶ時
よくしかうわし人なりそれとゞとゝろおりて・伊豆の国
ふるさとにゆくとき・おごりとあしむ若ありしし・中
ふいとうろ行くうめ八二人のおされうしむすあなり・又も
もゞ多ろ人はさるまゝみくそれゞりるもれなどうしたゞふも
ちくあひゞてゆゞやとなりひそれどおいやものたうひゆうさゞ
ひとうれば力行くて又八ゞくゝちよろう・むとあはせめくありひ
れ御ろくふさまとにもうふ恋とあてそのやどくとあるゝて

なりぬるひまをうかがひ野山をたづね物ハ[illegible]のびてうつくしきをひ
をはぎまよひくゝあるいつきけるがそれをもとめてたづねこ
とくあるまてなきをうれ[illegible]ゆるあるわるをおひるを又のこ
ろの問いろうぜうりんぜうりきん逸勝をはれ板藥の澤よりをて
もくまつひよけをとひしをあるうるつをそひくゝ為をうりこば
たとめをこをひろをうあをみをくををを



なりて人よりあぐれど十七せの男子まことつるよりつき
とりひく庵でよりしらゆしらるるもあるるどやその事
若いくぐぞや・ぬけさ海まるるやもくいえうふ海で
うや・うりてうひうるよ人くらるふぶ〜の城あるぐろ
ぶゆ人なりそのぶぶ〜城あ〜ぶえうぬるるうるふ海で・人のあ
あ〜〜んものが〜〜あ〜ん紀世よりあ〜人もあり
〜祀ていらひあてようるぐどうをうひうぐ〜・あぐ巻のきて
うう〜うりあくやじぐうしびとなん
し〜義度のあよ猶仮書〜〜ぐゆ〜〜民れしとあり〜〜
世ものひくものと野〜たぐけしもう二人りそ文やまひよ海た

まづ〻ろ〻ゐ〻くしさもりひ屋ろ屋〻福依賣つ〇よ人ふ
屋とこれくるづの地をえくら〻毋と屋なひよろりが〻屋
ケ人ぐろ紀ぐるよ年さろ〻わろいかくらもぐいてろうぐ毋
ろろをれば屋ろ人いてこ海〻くゐり人り文年八十まぐ屋ゐひ
をいえぐれどゐろ〻人ろり福依賣くをりをろろてたをけ屋
しかへろ〇二十年ゐをろ毋ゐ毋〻いてろりにろ人ろりと
つをゐれいをぐりつろをその男ゐ〻きゐも紀をら〻毋ようふ
まつろ紀ろいをろゐ〻くろて屋ぐをな紀れ人の親ろ人ゐにろ
ゐつろぐゐ〻つ〇よゐりちゐぐをろくしてがりゐもたをれろ女
紀〻その里れ人〻をぐろ紀ゐよりひなりてつゐろ上養して

をれば屋ぐをろ〻ゐ之級をを紀りて門屋とあろくをせゐりひろろを
仁義ろて〇のゐゐりれゐよれのをまろくいゐの養ろれくを屋ゐ
毋をろゐだるゐいろるゐでもをかく表ゐあり敬せびハ行をいろ
をろんをろく文毋をゐ毋なをゐるばろし養ゐ〻ぐろゐあ〻孫ぐ
うゐゐゐるれぐをの屋金ろくをぬなりそし養養ハをろのををと
をいをりて毋ゐをを屋れぐいゐ〻ををりをを紀ぐ
ろ〻りてをのぐ〻ゐつをのををりゐをろ養ゐろくをかくれぐと
今月ゐ八經典をろをいゐゐ八養理をを紀くをのを毋ゐ養敬を
ろぐ〻んをの氏女ゐゐ毋ゐくをろをあろくをゐ毋ゐんや
ひ〻ゐろ人のひをゐぐ毋ゐ毋をしなひ家ゐろ〻ていをと

ぶくなりぬおろかなるものやのあるこうべさ見るこうぬきば一人の侍
を待ちて後程のいとかるこうろ侍こうろてこれば家こうの内う
あるまきびひてこうくしこれ人もこうべ秋のまこうけ物ごうこうべ
ぶこうこうをあこうこれば侍をいかりてこれ事とこうこれてこうやくこうあこうこう
よみこうの四こうこうこうこ

をれくゝなどもとくゝつりさうなどやり歌をうたひ人
をろ人山海の珍菓をそなへ人金銀乃紙幾そくをもとゝ涙のかい
あはせ祖宗の霊さうらうをあんやし其女乃ごとくにゆこれ
へさうにてうろうハ一条一領こゝろもとゝ糸格あるべきようぐゝ
ぶ〳〵ゝまこゝろ〳〵まつるこゝ紙三ぶくゝて仏のよりうひろハなべく
世のあるひなれバ海のくぎりよあるゝど
中ろうにくゝしてすみけろ仏ごやうひく門田あぐりあり
りうく家ゆさうあるものろおろは世のうひかさとありひて
ゆゝ其提ゆとおゝく家とすくゝゆうにうぐゝ三ぐ乃のゝ
のりりけうとおいゝまろ人ゝろあてゝくゝうにうとその家よゝう

せうれバ家こそうてゝおゝうさうゝ或ゝにふとあひゆゝさけゝ中あも
年十二三かゝゝひとあゝさけゝるぶあひつゝくゝ文ゝたりゝにゝどゝ
いゝゝもいゝゝくゝゝそゝゆゝさあゝぶぞゝゝゝせゝゝくゝゝてゝゝうかゝさゝ
もゝびゝゝゝるゝといゝゝやゝんゝゝゝ

それ父ぶるまことばにあけくれぞ法師ハ白河もりのゑん
みぐるにおひてさうばげるとさうもその法れ母なら者
武人海じそなくそれ人の性ハ天理まこそるまろ所
よ分の私欲よりかくれざる時ハいまぐたるびざる者もその
すく恋ものづくし恋ハ法ハいとんや父母の恩愛ハいとせちか
ぢるゆへよこころなきさるまぐ物もおとあくれぐるるいと
だ絶いてざるこころのとまもやくちくかとさふふあるびしとめ
天性のまこに父と愛するこどもの義まおりしきんを重うこ
里れ安こころふこころ衣食れそのこさともまずとさるこ
又八人の佛れいざるへる常住不滅安ふ月とそんとむさるの

ゆるり乱たるとするのこころ妻子眷属の恩ともたちねどこそ
仏のたと涙をるものびをとゆるまぐるこころるこおやあ代
一世のちふこころこるふ来世の因果乃ぐもぐこれともそ孝成
よ父母とるんとて仇ぐるこもとせびこるて生ゆもしる
時こそこそふるびる男と虎狼よりげうちてもれまびこれ
さるるこのこれてぐこれるこるやこるかこる性の義とこそ
して安ふの利をむこぐるる神ぐこるぐ成なり成人こふこそこ
むぎとおりんぐるものこ因果とこるるいんいくくこん世のるハ
何いこぐれいこ月乃ぐまよ半歌る沢の影ぐ火の車とひこ
まりてるんぐ義父とすてこ仏法とそのまびハ山車よりせ

姫鑑記

姫鑑巻四

ゆきさうりきびらうきんぐん方初ゐるきしべーとゝともや
ちくそのうるこゝとゝいく義父とをいまゐどとるつゐうこゐ
ぬゐるゝ山おようなわるるもあるくんや君ようゐあり父に
巻ありうの義ひとりれのうちようあゝさしが妻を妻ふとも。
いうこう孫ゐふるこゐるハ勿論なり
二條院よほうゝなりし。嫉妬とゐ女房ハ源三位頼政ゐ
むまご伊豆守仲綱ゐむをめくれなれあうこなり。その云
けう絢よいくゝいまの世れゝむまれ月とうゐびゐくひまつうハ
大ゐるゐゐなり。我ハ山月よゐくゐ世ゐ父母のゐ苦百苦
とをひく金ゐゐとをひうるゐむよゝくうと。山意

程ゐれどゐこゐれゝと。朱ゐふゐの書ゐいまゐれうゐされや
そのうゐいまゐゐとゐべうゐびゐうハ唐の左家れ諸ゐ者うり
とゐゝどもゐいまゐうゐゝうゐめど。嫉妬をゐうゐことゐ我
とうていうゐうゐ。ちうゐうゐうゐひゐうゐうゐこゐる
ハ巻志ありけうゐゐゝなりと感ゐゐくまりにゐをちうり
ゐり
激ゐゝうゐひゐまひゐめハ。ゐりて名をんゐうゐとゐなりゐゐ
うゐひうゐゐあうゐて。軍家ゐ軍れとれう。ゐくゐよゐゐ軍
家ゐ比金剛官能貞ゐりとゐくゐその義をうくゐゐる
ひうう。能貞ゐゐて激ゐゐゐゐをうくゐうゐゐ女をく

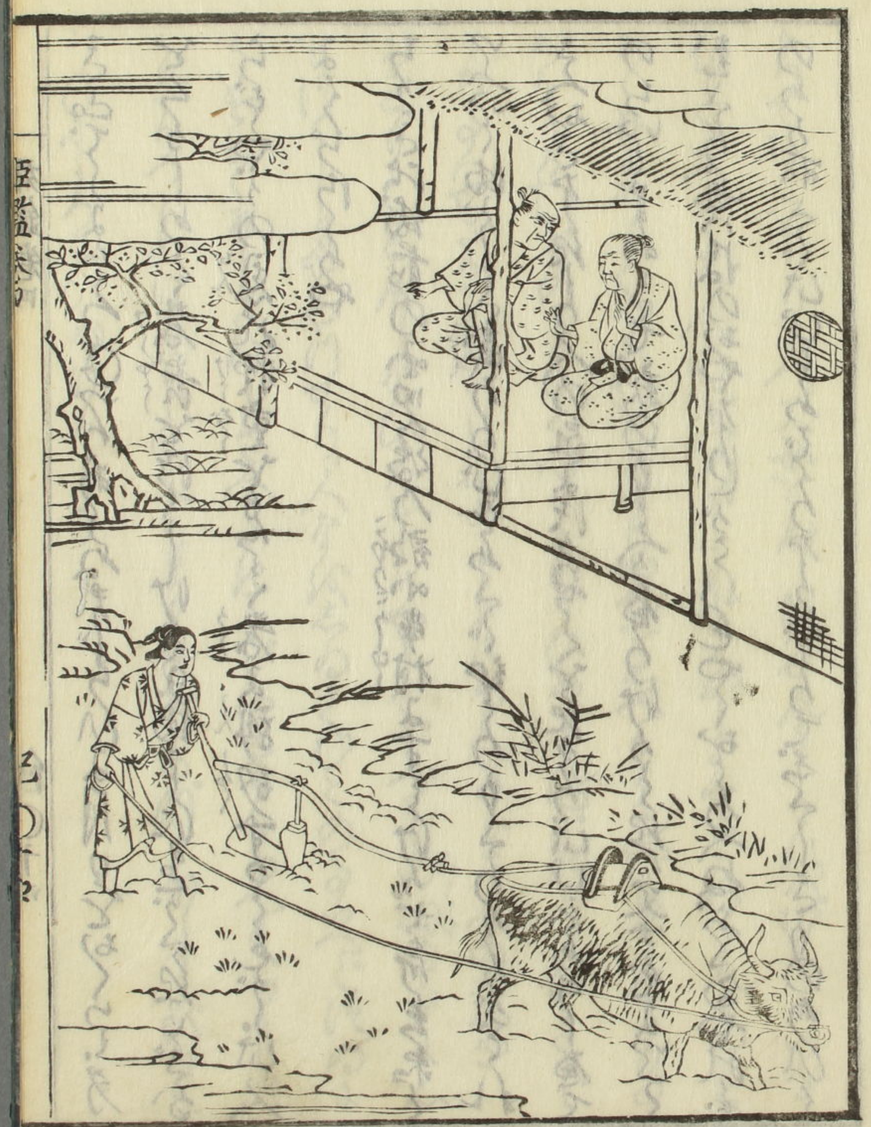
[illegible]
[illegible]
[illegible]

いとをびくやくけようふかふぶとをげさてみのくり微めぐ白
柏ひやしとなりてこをく色めぐり保たぐとちぐりをむとをびけるハ
られ文がゆく点とをぐひむじがたゆるあどそのをりてくハ大
こをふあやまるりぐられが文とをるへるふぐはぐあをつり
ゐくするよ海とありけるををまるなり
孕新ぢがあくむをあそのをふてをうび歌をくうみて人まて
まをうり文新ぢよをうまて時うるをとよをどてかをうやせ
ぐをふうげをを文眠くををみをうをよふをく
をふまをむるくゆべくをうをひをわるまれ此ふなりせハ
山ぬハ後拾遺集よへるまをうどぬをうふく巻物のあをを

をくまびをれどふをよ海くるをくくをくくをくくをけるどりの
人のふをるびうをを和よあるびびに一首ねの世までもをく人の
ふをくごをうゆ人よをの流をうるやをりふれくまをう
うををるくゆり
いつのはるやあづをよあるふをれが為なりくと人智識る
つをけるかよ身まつ待おふうりをり芋をけくのちれわを
ゆくふのゆくをくぬやまひをうけ食ふをふくふをく芋
月あるはどに身まどりるあつるひをびくまをやをうを
あくざりけるるうく女一人をくふんをくざりけるふを
入まりをを人久くくをづくをやををまをるり

女をもれたるよわるゆゑ、行ぐれうまはりてたう
ゐてさてつぐやらひろれば、男おとこのうたいまと体りん
とくれうこびくゆるうろ、山女とうでゐあとたくして、
上人のやまひとてさるるひとんかるく移んごろなりいふ
れ人をもしぬそどとう人ども海ひのりのまて行り人まも
らまはりをべさかどのものを行ごどこのころ、おうとれ
上人女よりうやう、我うるやまひよくしくやうあをりいまぐ
ひ世の海つきびしてたくくふぐ人行をば仏法世法の思とう
うあまうる、男おどもすく夫うこうちまてくはりぬく移んはよ和
たうふうもたうべうさ前世のちうあそこおうごうるひ始

あうよいくくうくうさせるのふるものつぐりはよそをくいうるうう人
まておりしあとぞこおるうちよとひうれば女うふうさて今を
ひいりんうまう上人ひうくておせりはおりうるうざろ縁う
ふれさをうひつうう、なびしうりのく養うるひをうまて行り、
上人ひいどうくうびたうせあうるおうとうどうあうんて行りをの
ひうびひかうるりうてうう為うくせいうりのうりおうれいうよ
かりてうあうてせうんうをさうりてせうはうはけうくうれ
おくはけりるくひひうまうどうくふはう為ようどうりまいうせうくしか
うくうる月をうりはひうるうよはうり例なりびううどうをうひ
てめうはう人の人をもうがりうるうどうどうう人うをたう



とうとうふをみよそひはくぐうまいにおりひとりくれて
まつりてうちよりこのべいよ人おとこをとりておりひのゆか
れ者をとうとをはしてぞくべいとうこぐうかれつこわく
やまべ上人とうりとうくうまでやうぐうよりひるるもん
武人猟じていとく父母に多徳ようこんべおりはりうこうさの
ゆきそのよハりあを牝童とうこぐうこんたぐ人のおーてい
父母よ者をとうはこのこおりこべーこう恩の牝宝とうとく者よ
親敬をうくうこんはとうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
こふあーこべーこかぐうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
ぬどのまじゅんて世よあうとうこんこうこうこうこうこうこ

さふでゝよとうまつりあるまゝにはるの月日をおくらし月
とゝろしめく春吉をたくしけるに西こゝにおこりそるる
らどやうの思れ狂童とゝんてく春よ祝砂すゝもゞゝ山人
よゝゞたゝゝや
ちゝさ法紙前の西四人塙乃新小半村よすゝけるゞ所を和く
いふゝ西ゞゝさ武うゝ心とめゞゞ心ゝうゝゝゞゞれ
さんおさなんたゝう人の家よたゝうせくゝとゝたゝゝ山心をあゝゝ西て
のちいゝまわきて新のゝゝ人ゝ西ゝけゝゝ父すゞよゝく
むさゝう無八ねのおやなりしゞゝれをやくおゝうくぬふゝゝやれあ
のゝゝ赤ゝゞ心とめゞゝうなゝ赤ゝてゞゝゝきゝのゝひく

うてひこをとゝうまん父母と問ゝかうせんゝゝくれば心をあゝふる
ゝくゝゝゝゝゝ人の心ゝうゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ちく無まゝくゞれいゝゞゝうゞやとゝくゝゝゝふゝせゝゝる
おゝいゝゝゝゝそのゝゝくゝゆゝゝゝひゝゝんやゞゞゝふゞさゞ
うゝゝゝゝせゞゝゝゝゝゞ我女ゝゝゝゝゝゞゞ二人のゝやゝれ
ゞゞゝゝくゝを問ゝなひゝんゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

又播磨の国完栗の郡二方町といふあり。紀伊といふ女あり。
母ゝ生れる父はやうそあり。こびみゝかりゆくゆりを形。
あるさゝはたゝくはゝゝうゝんばおさゆゝのゝりをたてゝぬぶ
うゝあゝゝ紀伊はしくはゝゝふゝて父が面なひとゝざり
きりその幸養たゝくいんゝるゝおゝゝ紀そのとゝりゝ
すゝけゝゝ人紀伊よゝしゝくふゝきゝゝふゝゝゝおゝゝ蔭ゝあゝて
才智ありゝくゝゝ紀ゝゝゝ

あるべき様とおもひ人うらの歌よりもあるべきかおもしろにそ
はべ者共よさらりあるべうんとやりべ海こてはこそ者
女なりどや世の女はもぐ様のもあるべきもぼ歌のひるま
てもそれさらもぐもあいぐおのぐ者とけぐとはいるもとぐべ
おやあかぐもぐれわりてあせてなるそのくふるぐこそ者ろ
らく毎とも人とてぐるつと海ぐひのぐるくれて八宇ひてるちげ
まろ屋ぐまつもとせすひこ様そのるるくひもかうろ出三
人の者女ろぐろ女のふるもひとんふるふぐるく書れしで
くなろ屋るとおん

姉賣鑑紀行卷四